

新しい授業づくりの文化を創る

第11号

令和4年12月16日「能力ベースの授業づくり実践講座」授業研究会

授業者:渡部 肇 教諭(吹田市立南山田小学校)

今回は、今年度最後のとなる5回目の「授業研究会」です。小学校4年生 社会科 単元「大阪府の特色ある地域の様子」について、10月31日に実施した教材研究会を踏まえて、「堺市で刃物づくりをする人々を笑顔にするために考えたこと」を発表し、お互いにアドバイスや良い点を伝える授業になりました。

新しい授業づくりの文化を創る 学び続ける教師の軌跡

令和4年度「能力ベースの授業づくり実践講座」最後の授業研究会

受講者の成長が感じられたグループ討議！ 5セットの研究会を経て着々と育まれる『吹田の授業づくりの文化』!!

教材研究会での学び(詳細は第10号を参照)

- 社会科は、「公民的資質」を身に付ける教科であり、子供に問題解決の経験を与える教科。
- 社会科は「人の営み」を学ぶ教科。地域の特色を調べぬいたうで、「自分だったらどうするか」、社会との関わり方を決めることが重要。
- 学習指導要領が期待する問題解決学習は「意思決定型」。根拠を持って選択し、最善解・納得解となる判断を行う。「～なので、～すべきである。」と考えられる子供を育てる。

授業者より(教材研究会を踏まえて)

Before	After
事実の積み重ね	事実をもとに選択・判断
リーフレットづくり (何をまとめるか)	4年5組ミニサミット (何ができるか・意思決定型)
一人ひとりが意思決定を行うことができるようにするために、『自分事』として捉えることを大切にしたい。	

授業者より(授業を終えて)

- 子供は、堺市の刃物づくりをする人々を笑顔にするために、刃物祭りのポスターをつくったり刃物に関連するゆるキャラを考えたりと、自分たちなりに取り組みを考えようとはしていた。
- 発表に対するアドバイスが、ポスター等の見栄えや飾りに集中してしまい、本質的なところにはいかなかったことが反省として挙げられる。

<グループ討議の論点> 教材研究会を活かした授業づくりになっていたか (各グループの発表より)

【「自分事」として捉える】

- 子供が「自分はどの立場で考えているのか」を明確にしたらよかったのではないかな。⇒自分の立ち位置を他者に伝えることによって、アドバイスがより本質的に。
- 本物に触れる機会を持つための教師の働きかけが必要だったのではないかな。

【「人の営み」を踏まえた授業づくり】

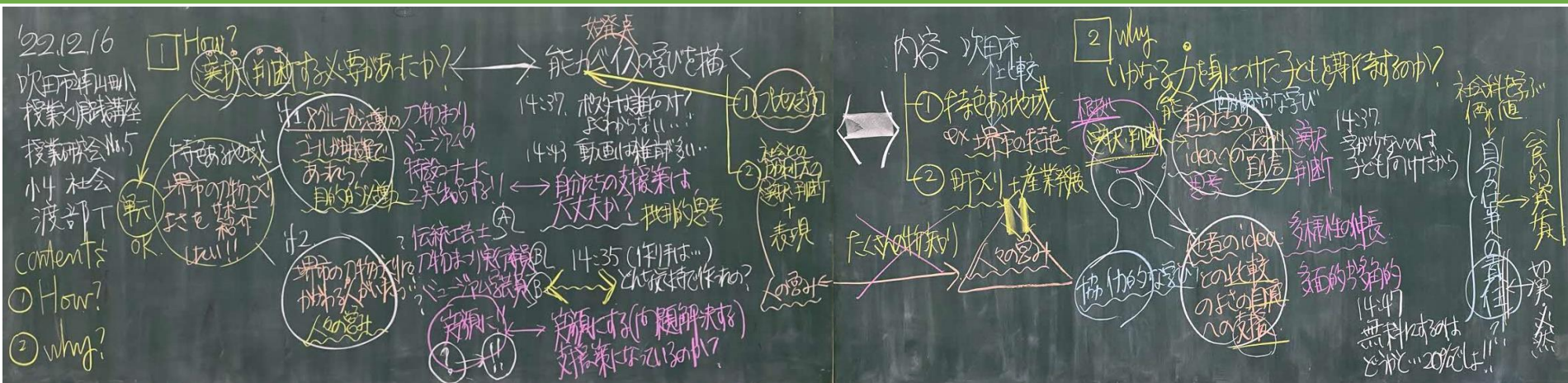
- 困っている人の危機感や悩みに共感することで、「なんとかしたい!」という思いを引き出す。
- それぞれの立場に焦点を当てて議論するような場面があってもよかったのでは。
- 子供はそれぞれの立場を持っていたはずなので、教師の明示的な働きかけが必要だったのでは。



<講師からの指導助言>

講師:島根県立大学 齊藤 一弥 教授

- ①選択・判断する必要があったか?
- ②いかなる能力を身に付けた子供を期待するか?



①選択・判断する必要があったか?

単元設計はできていたが、切実さがなく他人事になってしまっているため、子供が選択・判断する必要はなかった。自分事というのは、社会との関わりの中での設定が明確かどうか。

◎子供が自分事として捉え、選択・判断するための提案

1. 目的的活動の設定

活動のゴールを設定することによって、自らの考えと他者の考えを比較し、自分の考えを批判的に思考することによって、選択・判断を行う。

【批判的思考】=キーコンピテンシー

2. 「人の営み」からの課題解決

社会科を学ぶうえでの基本として、人の営みから課題を捉え、「その課題を解決することができる考えになっているか?」と批判的に思考することによって選択・判断を行う。

「能力ベースの学び」を描く (ベース=始発点)

今回は「選択・判断」という能力を始発点にして学びを描く必要がある。描く際のポイントとしては、「プロセス志向」と「社会との関わり方の選択・判断とその表現」があり、これらも資質・能力の1つとなる。

※『プロセス志向』

プロセス自体も身に付けさせたい能力の1つであるという考え方。今回の単元では、「選択・判断するプロセス」という問題解決の過程。
例:国語における「読むことのプロセス」(把握→精査→解釈→形成→共有)
体育における「合理的な解決に向けた学習プロセス」

能力だけでなく、内容についても小学校中学年では、多くの場合「人の営み」を起点として学ぶ必要がある。

【人の営み】をもって社会との関わり方を選択・判断できるようにする。

②いかなる能力を身に付けた子供を期待するか?

1. 自分(たち)の考えへのこだわりや自信
個人やグループによる「個別最適学習」によって選択・判断し、自分(たち)の考えに自信やこだわりを持つ。
2. 他者の考えとの「比較」・「よさの自覚」・「支援」
他者の考えに触れ、比較したり、よさを自覚したりすることによって、「協働的な学び」となり、自分の中の考えの多様性が伸長する。そして、もの見方が多面的・多角的になる。

選択・判断する際に1番大切なのは「根拠」であり、周りに流されず、自分で判断して生きていくことができるよう、自分の選択・判断に責任を持つことができる子供にしていきたい。

社会科を学ぶ価値⇒自分の仕事への責任がとれる=『公民的資質』

【受講者の声】

- どの教科を学ぶにしても、子供たちに切実性を持たせることが大切だと改めて学びました。(O先生)
- 社会科の根底にある公民的資質、これからの社会を生き、担う市民を育てていることを改めて感じました。(S先生)
- 自分の教科に当てはめて考えました。①目的意識(ゴールの設定)、②プロセス志向を自分の授業に取り入れていきます。(N先生)

【編集後記】

齊藤先生の助言の中にも「教材研究会で議論したことに対して、先生方がその視点から今日の実践を分析されたのは大変良かった」とのコメントがありました。この間の10回の講座の中で「吹田市の授業づくりの文化」は着々と育まれてきています。1月からは、令和5年度に向けた教材研究会がスタートします。この機会に、一緒に吹田の文化を創っていきませんか。お待ちしております! (文責:教育センター 加藤)